

奥歯カイツハケ岳

作・演出 藤谷 清六

宮本 「(妻に) 先生、前からお聞きしたかったんですけど、先生のお子さんは？」

山崎 「・・・私も知りたかったんです。」

妻 「いるわよ。ちょうど今大学二年生、あなた方より年下ね。」

夫 「一人っ子でね、亮介って言うんだよ。今、北大の農学部、卒業したらこの清里で牧場をやりたいらしいんだ。」

宮本 「そうですか。農学部・・・牧場を・・・。」

山崎 「・・・なんか夢があっていいな〜。」

Cast



夫・水木歌麿呂
永野 和宏



妻・水木あやめ
上田 明日夏



学生・宮本 修
KAZUKI



学生・山崎響子
小沢 由香

『お芝居を愛し、愛されて』



演出家・俳優
湯澤 紀保

清六先生ほどお芝居愛に溢れ、勉強熱心な方を他に知りません。数々のことに興味をもたれ、その為に、数々の資料を集め研究をされ、時には若い人達から教えを請い、今まで多くの作品を書き上げ上演されてきました。その内容は、シリアスドラマ、コメディ、ミュージカルなど多岐にわたっています。そして、今もなお新作を書いておられます。また、お芝居を上演するのは多くの費用が掛かりますが惜しみなく私財を投入し、今まで長い年月多くの方々を楽ませ、また演技というものに興味のある人達を役者として育ててこられました。清六先生のお嬢さんの涼子さんは、その昔、私の生徒さんで、その縁で私は先生と知り合うことが出来ました。私は先生の舞台『源蔵の恋』にも一度出演させてもらいましたが、それだけでなく東京からわざわざ呼んで下さり、甲府の居酒屋で美味しいお酒とおつまみをいただきながらお芝居や映画の話をして頂いています。いつも熱のこもった先生とのお話は、甲府のご馳走と一緒に、私の栄養になっています。いつまでもお体を大切にネクスト・ワンに向かって歩き続けて下さい。私は、先生がいつも送って下さる新作に目を通すのが楽しみです。私も台本を書きますが、なかにはこんなテーマで？という作品もあり、「私にはとても書けない」とリスペクトしております。

皆様も藤谷ワールドをぜひともお楽しみ下さい。

『不確実な時を紡いで』

かつては恋に落ちて一緒になった男女が、その記憶を互いに確認しつつ、お互いにどれだけ合わない性格なのかについて毎夜、酒を飲みながらこぼし続ける。毎夜、紡ぐようにその会話を重ねていく。そこが面白い。続くものは文化でしょう。文化とは人間が生活する中で生み出し、共有し、人間活動のあらゆる成果や様式を続けていくこと、のようだから。二人は、「衣食住、言語、芸術、道徳、習慣、価値観」について、確認しては話し続ける。嘆いて嘆息して責めあっても、それを投げ合う。投げたら受けてくれる人がいて、二人の時間は織物として紡がれていく。AIを理解していない文系の夫を馬鹿にする妻だけけど、学生相手には、どこまで行っても芸術は人間の生業だと言う。学生の夢の中で死刑囚がAIロボットになれずに呼吸困難になるのが、表している、人間という生(なま)の不確実系。夫もまた、別の学生相手に、芸術とは不確実性にあることを語る。二人は、過去の事にできない記憶を共有している。その生々しい傷と失われた時間が、二人の不確実な空間に流れ込む。夫は幻影を求めて空を彷徨う妻の手を取り、「秋深し 奥歯カイツハケ岳」と、お粗末な(?)俳句で笑いに誘い、現(うつつ)の温もりへと彼女を戻す。二人の紡がれた時間は、慈しみと哀しみが表裏であることを語っている。それがあから我々は、計算に終始できない過去を共有しつつ、不確実な明日を生きられるのだから。



県立大学名誉教授
坂本 玲子

『不器用な愛の奏句』

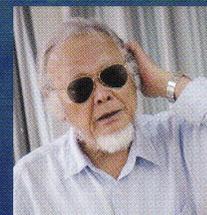


俳人「夏爐」同人
安部 李蹊

タイトルの元となる俳句は「秋深し奥歯カイツハケ岳」。伝統俳句^{たしな}だ経験のある者なら、三段切れたとか、カタカナ表記の是非を論じるところだが、舞台の終盤には、「何故奥歯潰滅なのか」「何故カイツという表記なのか」といった疑問や違和感が一気に融解し、心に残るフレーズになることだろう。さて、物語の主演は、出身地も趣味も嗜好も専門分野も違い、罵りや皮肉が行き交う夫婦。夫婦にそれぞれ訪問してくる生徒が、夫婦の幸福観を揺さぶっていく。いずれの場面でも、藤谷さんの豊富な知識とユーモアが満載である。そして、人間とAIの共存問題にも触れながら、韜晦^{とうかい}されているテーマは不器用な愛ではないだろうか。タイトルの解釈に戻ろう。「奥歯」は、妻において、フラストレーションの積み重ねからくる歯じり^{きり}の予防のところで登場してくるが、人間らしさそのものだ。「カイツ」は、AIではたどり着けなかった結末に対し、AIが降参したと思いたい。つまり、「奥歯カイツ」は、人間とAIを匂わせ、奥歯カイツの全体からは、「奥歯にもの挟まった言い方」とあるように、この夫婦に齟齬^{そご}がなくなることが示唆される。また、二人の積年の確執であるかのようなハケ岳は、澄みきった秋空に召されていく。こうして、終幕には「奥歯カイツハケ岳」のフレーズが、きっと皆さんの耳に^{みみ}瑣瑣^{ささ}の顔をいつまでも残していくことだろう。

『幼少の頃からのキマジメさ』

2024年『恍太よ、黄金の銃を撃て』2025年『ノイちゃんとギャオちゃん』2年続けてコメディを上演してまいりました。そろそろ大真面目で深刻なお芝居がしたくなりました。今年には数年前からあたためてきたこの『奥歯カイツハケ岳』を、出演者やスタッフの方々の努力により具現化することができました。ぼくの幼少の頃からのキマジメさが、ついに生かせる時がきたのです。どうぞごゆっくりご観劇ください。



藤谷 清六